Osaka University Knowledge Archive

Title	テクスト解釈の始まり
Author(s)	Pepping, Hans-Joachim
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44113
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【9】

氏　　名	PEPPING, HANS-JOACHIM（ペピン ハンス ヨアヒム）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　17451　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**テクスト解釈の始まり**
論文審査委員	（主査） 教　授　溝口　宏平 （副査） 教　授　里見　軍之　　教　授　中岡　成文　　助教授　三谷　研爾 慶應義塾大学文学部教授　中川　純男

論文内容の要旨

本論文全体の論究の課題及び趣旨は、「テクストの創出並びにテクスト解釈の成立は、コミュニケーション及び相互に対立する論争のプロセスを経てのみ実現する」という仮説を、古代、特に古代ギリシア及びイスラエルにおける解釈方法の誕生からパウロにおける予型論的解釈の成立にいたる過程を詳細に追跡することによって検証するという試みにある。その点で、本論文は、近年の解釈学研究の流れの中で、ややもすれば等閑視されがちな解釈の歴史的成立の原点に戻り、解釈の生成の場面から解釈学を構成する根本要素を取り出すという意欲的研究であり、本邦においてのみならず、解釈学発祥の地たる西欧においても例の少ない試みと言えよう。

本論文の構成は、序論、1～6章及び終章、註及び文献表からなり、全体として400字詰め原稿用紙約430枚強にあたる。ただし、本論文は、邦文論文としての完成度を高める必要上から、申請者の仕上げた研究の、量及び内容の上で略4分の1にとどまる。

以下に、各章の要旨を記す。

(1)序論では、U. エーコのテーゼを手掛かりとして、具体的な解釈方法の形成にとって最も重要な役割を果たすものは「受容者」であるとする仮説が立てられ、今後の議論の展開の方向及び課題が示される。(2)第1章では、ユダヤ文明におけるテクスト解釈の起源を示すことを通して、テクストの成立と意味の創出は、本質的にひとつのコミュニケーション・プロセスに基づいていること、同時にここにはすでに予型論的な解釈学的思考モデルが見られることが示される。(3)第2章では、ギリシア文明における解釈方法が概観され、時代遅れとなるものを救出せんとする努力の結果、アレゴリー的解釈が生み出される経緯が示される。そしてそうした解釈の生成の背景としての共同体の意義が明らかにされる。(4)第3章では、ヘレニズム化におけるユダヤ教のなかでアレゴリー的解釈の方法の進展が見られることを示すことによって、とりわけ「七十人訳（Seputuaginta）」及びフィロンのアレゴリー的解釈の意義に光をあてることによって、コミュニケーション的プロセスによる意味の創出過程が明らかにされる。(5)第4章では、さらに進んでクムラン文書の分析を通して、ペシェル方法という解釈方法の新展開が示されることになる。(6)第5章は、イエスをテクスト解釈者として特色付けることを通して、予言的解釈の成立を明らかにする。(7)そして第6章では、テクスト解釈者としてのイエスを受けて、パウロがなしたアレゴリー的、予型論的解釈の発展を跡付け、オリゲネスによるその方法の確立が明らかにされる。そして、それ以後の解釈学の課題が、「いかに」という方法概念から、解釈の

「どこで」と「何のために」という問題へと移行し始めることが予示され、今後の解釈学研究の課題とされる。

論文審査の結果の要旨

本論文の特色は、古代ギリシアから初期キリスト教神学にいたる時代の膨大な研究文献の検討をもとに、19世紀になって一般的解釈学として成立する解釈学的方法の原点が古代ギリシア及びイスラエルのテクスト解釈にみられることを示した点にある。とりわけ注目すべき点は、従来個別的にしか研究されてこなかったギリシア及びイスラエルにおけるテクスト解釈の伝統を、解釈における解釈者の構成的役割を解明するというひとつの視点から俯瞰することを可能にした点にある。古代ギリシアにおけるテクスト解釈の典型はアレゴリーにあり、それはまた、イスラエルの聖典解釈にも見られるが、歴史性を基にするイスラエルの宗教的伝統は、意味の個別性を捨象し普遍性を追求するアレゴリーを単純に許容することができず、フィロンを経てパウロにおいて、歴史の個別性に現在的意味を読み取る予型論的解釈が成立する。しかし、個別性には意味付けを拒むという問題点が含まれる。その点に注目した本論文の筆者は、パウロの語る「キリストにおいて」という表現を「テクスト解釈の場」と考え、宗教的経験による媒介を経て個別的歴史的出来事に現在的意味が付与されるとみなしている。そしてそのような解釈法が、パウロ以後の教父によって「霊的解釈」として一般化するという極めて重要な指摘をなしている。

以上の点からみて、またさらに、古代ギリシア及びイスラエルを現代的解釈学の視点から意義付けなおすという試みの希少性からみて、本論文は現代の解釈学研究にとって極めて重要な布石をなす研究と考えられる。惜しむらくは、本論文が、研究成果の一部にとどまり、また、たとえこうした視点からの解釈学研究が例をみないとはいえ、若干解説的歴史記述に流れる傾向が見られる。しかし、本論文の学術的価値は極めて高度なものであり、よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。